

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン

2020. 秋号
vol.50
[インキュビー]

incu・be



これまでの
歩みが
道となる

特集

未来に駆け出す指針のを見つけ方
リバネス研究費50回記念「incu・be賞」設置!

incu・be vol.50 contents

特集 未来に駆け出す指針の見つけ方

- 06 不確実な人生の選択を主体的なものにする物語理論
(中川 瑛 さん 株式会社ちえもの 代表取締役)
- 08 研究経験の細分化から、自分の指針を再構築する
(野見山 玲子 さん 株式会社テラス 代表)
- 10 変化する自分を楽しみ、ロールモデル不在の時代を駆ける
(環野 真理子 株式会社リバネス 人材開発事業部 部長)

リバネス研究費50回記念特集

意志ある一步を飛躍につなげるリバネス研究費

- 20 歴代採択者に聞く！リバネス研究費の使い倒し方
- 22 企業と連携したから見えた、産業界の現場感
(小南 友里さん 東京大学大学院 農学生命科学研究科 水圏生物学専攻 水圏生命科学講座 特任助教)
- 23 自分の仮説を専門分野の外に問い、研究の芯を確立する
(乗本 裕明さん マックス・プランク脳科学研究所 研究員)
- 24 リバネス研究費50回×『incu・be』50号
分野不問。情熱ある大学生・大学院生に最大50万円を提供する
「リバネス研究費 incu・be賞」設置！
(丸 幸弘 株式会社リバネス 代表取締役 グループCEO)
- 25 第50回リバネス研究費 申請者募集

響け、博士の力

- 03 前提に立ち返って課題を捉えなおす力
森 正樹 さん 株式会社ディー・エヌ・エー 兼 DeSC ヘルスケア株式会社 出向社員

研究の「師匠」を見つけよう～研究室の選び方～

- 04 学生とコラボレートしながら創り続ける研究の最先端
永野 修作 さん 立教大学 理学部化学科 教授

探しに行こう 自分の場所

- 14 「伝わるデザイン」で、アカデミアの研究を世に羽ばたかせる
片山 なつ さん 千葉大学大学院 理学研究院 日本学術振興会特別研究員 (RPD)
- 16 所属や領域にとらわれず直感で自由に研究して良い
尾上 弘晃さん 慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 准教授 / 株式会社セルフファイバ 取締役 CTO

キャリアディスカバリーフォーラム

- 26 研究開発型企業と研究者が描く未来を議論
- 27 【次回】キャリアディスカバリーフォーラム2020冬を開催
【12/5参加決定！】研究者とともに研究業界の課題を解決する
杉原淳一さん 株式会社バイオインパクト 代表取締役

キャリア発見！ツールボックス

- 18 「なんか変だな？」を指針に変える～違和感abcdクエスチョン～

お知らせ

- 12 あなたとのディスカッションを、中高生が待っている！ 研究アドバイザー募集中！
- 28 『incu・be』を作っているのはどんな人？

響け、博士の力

前提に立ち返って課題を捉えなおす力

私が心理学に興味を持ったきっかけは、「自身について考え込む行為がうつ病の原因の1つ」とする学説に疑問を持ったことでした。私自身、自分のことでよく悩んでいましたが、どこかうまく乗り越えてきた経験があったからです。この経験から、うつにつながる悩み方と、うつを防ぐ悩み方の比較に着目しました。そして、辛い気持ちに囚われ続ける悩み方は良くないけれど、「どうすればこの悩みを解決できるか」と冷静に問題の解決を目指す悩み方は、むしろストレスを抑え、自分自身の理解を深めることにより、うつになりにくい生き方につながる、という結論に至りました。今思えば、私にとって研究とは、「自分自身を知る営み」だったのかもしれない。

博士課程への進学とともに、生物学から心理学へと専攻を変えた私にとって、最も苦労したのは先行研究との対応づけでした。「形のない研究対象」を扱う心理学では、研究者ごとに概念や理論の解釈が異なることが多く、自分の感じた疑問がどのような前提のもとに成り立つのか、その説明を丁寧に行う必要がありました。このような経験から、疑問や違和感をその前提に立ち返りながら深く考え、共感を得られる課題として捉えなおす力も磨かれたと感じています。

そんな私がビジネスの世界に踏み込んだのは、「研究成果を社会に届けたい」「伝えた反応をより近くで感じたい」という想いからでした。現在勤務する株式会社DeNAのヘルスケア部門では、「kencom」というアプリケーションに集まってくるユーザーのヘルスケア関連データの解析を担当し、アプリの仕掛け*がユーザーの行動や健康に与えた効果を調べています。ユーザーの特徴などの「前提」を考慮してデータに向き合い、「形のない課題」を捉える必要があるため、博士課程での経験はもちろん、研究成果自体も活きている実感があります。

ヘルスケアの社会的な理解に訴えかけ、「楽しみながら健康になれる社会の実現を目指していますが、将来的にはもう一步踏み込んで、メンタルケアのサービスも充実させたいと考えています。そのためには、精神疾患の知識やエビデンスとなる心理学研究をユーザーに正しく理解してもらうことが必要であり、その難しさを感じつつも、専門性を活かしたサービス設計へやりがいをもって挑戦していきたいです。 (文・黒住 嶺)

*「kencom」では、企業理念「楽しみながら、健康に。」の実現に向け、ヘルスケアに関する啓発や健康につながる行動を促すことを目的に、サイトの閲覧数や活動報告に応じてアプリ内のキャラクターが成長するような「遊び」の要素を実装している。



もりまさき
森 正樹 さん

博士 (心理学)

株式会社ディー・エヌ・エー
兼 DeSCヘルスケア株式会社
出向社員



▲ヘルスケアエンターテインメントアプリ「kencom」のユーザーインタフェース例

2016年、東京大学大学院総合文化研究科にて、「自己注目」の適応的側面に着目したうつ病予防の基礎研究で博士号を取得。2017年、専修大学での特別研究員に兼任、2018年任期終了。2019年、前職を経て現在の株式会社ディー・エヌ・エーに入社。ヘルスケア部門で身体的な健康管理に関するデータ分析を行う傍ら、精神的な健康維持のためのサービス提供も模索している。

研究の「師匠」を見つけよう

～研究室の選び方～

「これから研究に打ち込み、研究者として成長したい」そんな想いで迎える研究室選択のとき。研究室はどんな視点で選びますか？ 本コーナーは、「自分に合った『研究の師匠』との出会いを応援したい」そんな想いから立ち上げた企画です。

学生とコラボレートしながら創り続ける研究の最先端

立教大学 理学部化学科 教授

永野 修作 さん

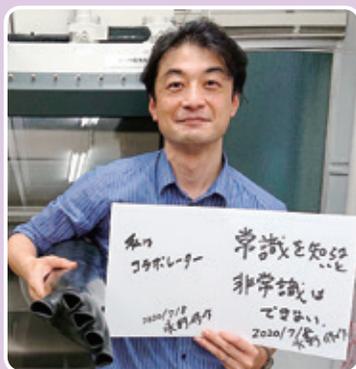
修士号取得後に、企業に研究員として就職するも、商品開発を行う中で取引先と対等に議論してもらえなかった経験を持つ永野さん。この苦い経験を武器に、博士課程に入り直すことを決意。

揮発性がない高分子物質の分子一層が並んだ単分子膜の作製には、水面に展開し、転写する手法が必要である。高分子超薄膜の博士研究を始めた当時、水面との直接的な相互作用を持たない疎水性高分子は、水面に広がれず、単分子膜を作ることはできないという考えが常識であった。しかし、永野さんは液晶物質を混合すれば水面上でも疎水性高分子の単分子膜ができることを新たに発見した。当時、非常識ともいえるこのアプローチで新しい分子薄膜の作製法を創り出すことに成功したのだ。

博士号取得後は改めて液晶ディスプレイを開発する企業の研究所に就職した。しかし、商品開発は既存の研究を活用した製品作りであり、最先端の知見

を生み出すものではないことに気づいた。そんな中、学生時の恩師から新しく研究室を立ち上げるためのメンバーに誘われた。「一緒に最先端の研究をしよう」。その言葉が永野さんの心に突き刺さった。最先端を創る側でいたいという気持ちに奮起し、再び大学に戻る決意をした。

それから17年。今年、立教大学の教授として、自分の研究室の立ち上げを行っている。「改めて考えると、私は最先端を追いかける研究者であり続けたいと思っていたのでしょうか」と永野さんは語る。研究とは世界に新たな知見をもたらすということ。まだ誰も知らないことを追究するので、そこには教師も生徒もない。「だから、私も学生とともに学び続けるコラボレーターとして一緒に最先端を創っていきたい」と永野さんは言う。企業研究職と大学での研究、両方を知りながら、大学という場で研究することを選んだ永野さんの挑戦は続く。 (文・平田 和也)



研究理念

「常識を知らないと非常識はできない」

誰も思いつかない非常識な考え方で成果を出すためには、論文や教科書を読むこととともに、実際に自分で実験してまずは常識を知ることが大切。

教育理念

「私はコラボレーター」

私は先生ではなくコラボレーターだ！私もわからないことはたくさんある。研究を進めていく中で、わからないことがあったら一緒に勉強していこう！！

先生に聞いた、 研究室の探し方

1：教員と話し、雰囲気を知る。

長い時間をともに過ごすので、教員との相性は一番大切。実際に話し、研究室の雰囲気をよく知ること。あとはフィーリング！

2：修士・博士号取得後の就職先を考える・調べる。

4年生で選ぶ研究室は最初のキャリアとなる。将来に大きく影響するので研究者として生きるのであれば、自分がどの分野に進むかをしっかり考えてほしい。



特集

未来に駆け出す 指針の見つけ方

いま挑戦していることは
自分の目指す姿につながっているのか？

進路を選ぶときの決断は
本当にこれで良かったのか？

未来を見据えた現在の決断には
迷いがつきものです。

未来に向けて
自信をもって進んでいくためには、
自分の行動や選択の指針となるものが
必要となります。

たとえば、何としても達成したい目標や、
大切にしたい価値観が
それにあたるでしょう。

この特集では、
自分の未来の指針を発見する方法を、
キャリアに関する研究や実践にかかわってきた
3名へのインタビューから見ていきます。

不確実な人生の選択を 主体的なものにする物語理論

中川 瑛 さん

株式会社ちえもの
代表取締役

物語理論は文学の中でも物語構造論に関係する考え方だ。世界に伝わる神話や英雄譚は無限にあるように思えるが、分析してみると実は話の筋をいくつかの型に分類できる。逆に、その型を応用すれば面白いシナリオを作り出すことができるため、ハリウッド映画のシナリオライティングなどにも応用されてきた。これを現実の行動選択にも生かしてしまおうというのが中川さんのアイデアだ。



キャリアの悩みは構造化できる

中川さんが行動の選択に物語理論が使えることに気がついたのは、後輩たちの留学相談を受けたのがきっかけだ。自身が参加した留学助成プログラムに興味をもつ後輩たち1000人近くから相談を受けたが、彼らの悩みはいつも同じだった。次の一步をどう選ぶかということだ。中川さんによると、次の行動の選び方には2種類しかないという。これまでの延長線上の行動をとるか、理想の状態から逆算して行動を決定するかだ。昔から小説を書くのが好きだった中川さんは、理想の状態から次の行動を逆算する思考プロセスが、シナリオライティングの手法として応用されていた物語理論そのものだとすることに気がついた。「何か目指す状態があって、そのために何をするのかを決定するというのは、結末に向かってエピソードを組み立てていく物語の作り方と同じで、どちらも構造化できるんです」。

過去と未来を物語ることで見える次の一步

物語理論を使って行動選択をする過程は、自分の経験を部品として物語を書くようなものだ。まず過去の経験を洗い出す。学歴や資格ではなく、自分の心に残るエピソードを書き出そう。次に、未来の自分の姿を描く。「研究者になっている」だけでなく、どんな研究者になっているのか、職や立場についての先の姿まで思い描いてほしい。過去と未来を書き出せたら、そのエピソードを選び抜き、自分の人生の物語を作ってみよう。

物語には型があり、それがわかれば誰でも物語を組み立てることができる。たとえば、「友達がいらない主人公に、物語の終盤には友達ができる」というように、物語は何かの欠如と解消を繰り返しながら進んでいくという「欠如-解消モデル」がある。このような型を使いながら、自分のエピソードを組み立てていくと、自ずと過去と未来の間に足りないエピソードが見えてくる。それを補



うような選択を次の一步として選べばよいのだ。このように、物語理論を知ること、自分の次の選択に自信が持てるようになるはずだ。

他者を動かし未来を拓く物語の力

読者の中には「今やりたいことをとにかくやっている」という直感型でエネルギー溢れるタイプもいるだろう。そんな人には、前述のように逆算してどのような経験を積み重ねるかを決めるのは向いていないと感じられるかもしれない。しかし、奨学金獲得や就職活動など、自分のこれまで、そしてこれからの人生の歩みについて他者に説明する必要に迫られるとき、直感タイプの人には頭を抱えてしまう。実は、物語理論はそんなタイプの人にも役に立つ。運命に身を任せてきた生き方を物語として捉え直していくことで、あたかも初めから計画通りだったかのようなキャリアとして表現できるのだ。物語になれば、他者へも伝わりやすくなる。借り物ではない自分自身の物語を、相手や場面に合わせて魅力的に語る事ができれば、周囲の人を動かし自分のやりたいことを実現しやすい環境を作る力になるのだ。

人生の伏線を張る

物語理論を使って自分の人生について考えるときは「柔軟性を意識しておくこと」を中川さんは推奨している。自分の内面的な目標を達成する上で、それを満たす職や環境などの外的目標は1つ

中川 瑛 (なかがわ えい) プロフィール

北海道出身。幼い頃の知識への渴望を糧に、複数の奨学金をえて仏ストラスブール政治学院にて政治哲学/倫理学を研究。「知的好奇心に優しい社会を創る」を理念に株式会社ちえものを創業。科学哲学をベースにしたコンサルティングやキャリアイベントなどを担う。現在は法政大学大学院政策創造研究科修士課程に在学し、研究者の意識変容について研究を続ける。

だけではない。そこで、現在のストーリーからは一見はずれるようなことでも、将来の「伏線」となる経験をひっそりと戦略的に積んでおいてよいのだ。その伏線は異分野の研究者と友達になることかもしれないし、何かのイベントを開催すること、はたまた一冊の本に出会うことかもしれない。「博士論文の研究をするときは、この実験やこのテーマがうまくいかなかったためのために、とさまざまな実験やテーマを仕込んでおくと思います。自分の人生の中でどのような経験を積むのかを選び取っていくときもそれと同じなのです」と自身も研究者である中川さんは語る。

研究者の人生設計は、自身でコントロールしきれない事象に左右されることも多いはずだ。物語理論を活用すれば、不確定な状態の中でも自分の選択をより主体的なものに変えられる。だからこそ、次の一步に自信を持って歩んでいくためのガイドとなるのではないだろうか。

(文・重永 美由希)

物語理論を使ったキャリアの描き方についてもっと詳しく知りたい!

中川さんのこれまでのノウハウが書籍でまとめられています。物語理論を使って自分の人生の物語を描く方法から、それを面接などで活かす方法まで丁寧に説明してあります。ぜひ読んでみてください。



最高のキャリアの描き方 トビタテ!
留学JAPAN生と物語理論
株式会社ちえもの
代表取締役 中川 瑛 著/中央経済社

研究経験の細分化から、 自分の指針を再構築する

野見山 玲子 さん

株式会社テラス 代表

「研究は面白い！けれども、このまま研究をやり続けてよいのだろうか…。自分の未来を想像してみるとその姿はぼんやりしていて心もとない。そこで、自身も研究経験を持ち、現在はビジネスパーソンを中心にキャリア設計の支援をしている野見山さんに、研究を続けたい研究者が自分の目標をクリアに見据えるためのヒントを聞いた。



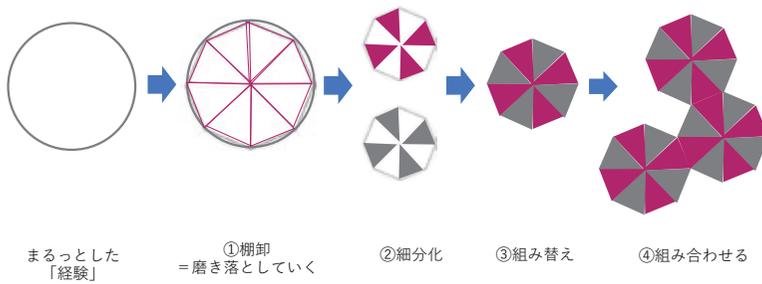
原因は「研究」という言葉にあり

研究で実現したいことや目指す研究者像はあるが、それが具体的ではないことに不安を感じる人は多いのではないだろうか。その理由を、野見山さんは次のように分析する。「研究という言葉で、自分の実現したいことや夢などの『目的』をひとくりりにしていることが、目指す未来像が具体的にしにくい原因です」。実際、大学院生や若手研究者が自分のやりたいことを尋ねられると、「研究を続けたい」「研究経験を活かしたい」という答えが多い。その想いの背景には実は、専門性を突き詰める中で得られた独自の視点や、研究の中で感じるやりがいなど、さまざまな要素が含まれている。これらを「研究」という言葉でひとくりりにしたとたんに、自らの詳細な実現したいことや夢、目的が見えなくなってしまう。

最初の一步は経験の細分化

そこでまずは、これまでの研究経験を細分化し

てみることを野見山さんは提案する。たとえば、大学院進学・研究室選びのときに大切にしたことや、今までに取り組んだ研究プロジェクトで最もやりがいを感じた瞬間などを思い出してみよう。このときに、自分がどのように感じたかといった主観的な価値を見る視点だけではなく、社会や周りの人にどのような価値を届けられたか、客観的に実現した点の2つの視点から分析することがポイントだ。研究で開発したツールが他の人の研究を前に進めた、研究室の備品管理がしやすいように研究室に働きかけ、新しい運用方法を提案したといったことなどだ。このように自分の研究経験を2つの視点からより細かく見ていくことで、自分の内側にある価値観や、外側に向けて発揮できる力をより明確に見出すことができるのだ。さらに、幼い頃のできごとや趣味など、研究以外の原体験も一緒に振り返ることで、自分の変わらないコアとなる価値観、強み、弱みの理解をさらに進めることができるだろう。



◀経験の細分化と再構築のイメージ図
 大つかみに捉えている「経験」というものをより細かい能力や、価値観へと細分化する。いくつかの経験を細分化したら、その中から共通する強みやこれだけは大切にしたいという価値観や信念を組み合わせる（再構築）。再構築の際には組み替えるだけではなく、最上位の要素以外は捨てるのがポイントだ。

「手放す勇気」で新しい自分を再構築する

細分化によって自分の価値観や強みを洗い出したら、その中から絶対に譲れないものを選び、組み合わせるのが次のステップだ。この「再構築」について野見山さんは、自身の例を教えてくださいました。野見山さんは自身の経験のうち、医療系の家系で幼いころから遺伝病を持つ患者さんたちと関わる中で、病気を予防できるようにしたいという想い、「研究成果を社会につなぐ」という志、異文化、異業種など関係なく多様な人と協業できる力の3つの要素を特に重要なものとして選び出した。これらを再構築した結果、外資医薬系商社という進路が見えた。「このときに、細分化で出した全部の要素を使わずに、いくつかの要素を手放すことがポイントです」と野見山さんは指摘する。一途に研究を続け、年月をかけて実績を積んできた研究者にとっては、培った専門性すべてが思い入れのあるものだろう。しかし、本当に重要なもの以外を、一度勇気を出して手放して考えることで、自分の指針が見えやすくなるはずだ。「手放して考えてもなくなるわけではないので、怖がらず安心してやってみてほしいと思います」。

研究をするように過去と未来を見る

自分の指針が見えれば、そこから先は実現したい未来の仮説を立て、達成するためのステップを設計する。その分野について調べたり、実際に挑戦してみることで仮説を検証し、その結果を考察しながら計画を改善していくところは、研究者の得意とするところだろう。「将来の目標を立てるといって堅苦しく考えてしまいがちですが、実はそのために必要なプロセスは研究者にとって身近な作業だと思います」と野見山さんは話す。漠然と未来が見えないと感じていたあなたも、一度立ち止まって自分と向き合うことで、未来で活躍する自分の姿がより鮮明に描けるようになるはずだ。
 (文・伊達山 泉)

野見山 玲子 (のみやま れいこ) プロフィール
 東京都出身。薬剤師、MBA。国立がん研究センターにて研究者としてキャリアをスタートし、外資医薬系商社にて最高総括責任者、大手外資系製薬企業メルク、アラガン日本支社にて、組織と製品の最高品質責任者を最年少で歴任。2017年、テントウフォー株式会社の社長に就任。2019年に株式会社テラス を立ち上げ、ライフイベントによらずキャリアもライフも大事に生きる個人・企業の成長を支援している。

変化する自分を楽しみ、 ロールモデル不在の時代を駆ける

環野 真理子

株式会社リバネス 人材開発事業部 部長
キャリアコンサルタント

本誌『incu・be』の立ち上げ人の1人でもある環野は、リバネス入社以来、人材開発部門で、10年以上にわたり研究者のキャリア、生き様に立ち会ってきた。キャリアコンサルタントの資格も有する研究者のキャリアのプロとしての視点から、ここでは特に若手研究者の立場にフォーカスした指針づくりの考え方を伝える。



研究者にとっても多様なキャリアが描ける時代

「論文のインパクトファクターを積み上げ、トップレベルの研究機関や有名な大企業に入ることが、研究キャリアとしての成功である」という考え方は、もはや古くなった。実際、『incu・be』でも、起業やURAなど、研究職にかかわらず研究経験を起点としてさまざまな活躍をする人の事例が多く見られる。多様な生き方や価値観が尊重される時代では、研究職など、仕事の枠にとらわれず、自らの生き方を探していくことで、仕事や活躍の場を自ら生むことができるのだ。「研究者は常に、人とは違う道を歩むこと、ゼロから何かを生み出すのが得意なはず。自分のキャリアも自ら開拓するつもりで考えると良いと思います」と、環野は語る。

新たな挑戦と振り返りを通し、指針をつくる

研究者のロールモデルが存在しない時代に、研究者は自分の生き方をどのように決めていけばよ

いのだろうか。もし今、それがわからないのであれば、自分の興味のある世界で新しいことにまずは挑戦してみるのがよいだろう。企業インターンやボランティアなどなんでもよい。そのとき感じた自分のこだわりや社会の課題、ビジネスの仕組みなどを実感できるはずであり、それを振り返ることで自分にとって何が大事なのかが浮き彫りになる。それがいずれは自分の生き方を決める指針になっていく。「卒業までの数年より、その後の人生の方が圧倒的に長い。たった数年の専門性だけにしがみつかず、いろんなことをやってみて、自分の変化を楽しんでほしい」と、環野はエールを送る。
(文・内田 早紀)

環野 真理子(かの まりこ)プロフィール
筑波大学大学院生命環境科学研究科生命共存科学専攻修了 修士(理学)。専門は地球生物化学。リバネスでは一貫して人材開発に関わる。生涯の主體的なキャリア開発と組織の成長をつなげていきたいという想いで、キャリアコンサルタント(国家資格)を取得。

未来の指針は自分の 経験から見いだせる

心に残るエピソードを素材として自分のストーリーを描く中川さんの物語理論、
これまでのできごとを細分化して自分の姿を再構築する野見山さんの技法、
環野が提案する環境に応じて変わる自分の姿から独自の道を見出す姿勢。

3名のインタビューからは、

未来の指針はこれまでの経験を材料にして形作られることが見えてきました。

「キャリア」という言葉の由来は、馬車や荷車の車輪の跡にあるといわれます。
これまでの自分の足跡が、次の岐路や難所に直面したときの道標となるのです。

これからの指針を得るためには、前を見据えるだけでなく、
自分のこれまでを一度振り返ってみてはいかがでしょうか。

あなたとのディスカッションを、中高生が待っている！

研究アドバイザー 募集中！

リバネスでは、いつでもどこでも、誰もが研究活動に取り組める世界を目指し、中高生の研究活動を多方面から後押ししています。この活動には、現役研究者の協力が不可欠です。研究アドバイザーとして、研究に向かう姿勢や専門知識、研究がひらく未来などを子どもたちに伝えることで、彼らの研究をともに広げていきませんか？

純粋な好奇心や課題意識から生まれる中高生の新たな視点に触れることは、皆さん自身の刺激にもなるはずです。現役研究者からのたくさんのご応募をお待ちしています！



こんなことを伝えてください

- 自分の研究や周辺分野に関する情報
- 先行研究の調べ方
- 仮説の立て方や、研究計画の立て方
- 実験のやり方
- 伝わりやすい発表や記述の仕方
- あなた自身のこと（なぜその研究をしているのか、研究者としての将来像など）

研究アドバイザー登録の条件

- 修士課程在学中、修士号取得者、博士課程在学中、博士号取得者のいずれかであること。もしくはそれ相当の研究経験を有する大学生、高専生。

168名の方が登録中！

(2020/5/11時点)

人材募集中のプロジェクト



中高生のための学会サイエンスキャッスル2020

関東と関西で行われる中高生のための学会サイエンスキャッスルにて、研究ディスカッションを行う若手研究者を募集しています。各会場 200名～400名の中高生研究者が集まるアジア最大級の学会です！

[活動内容] サイエンスキャッスルで行われるポスター発表での研究ディスカッション
なお、オンラインに変更される場合がございます。

[活動日] 12月19日(土)～20日(日) 関東大会@東京都内(予定)
12月20日(日) 関西大会@大阪府

[詳細URL] <https://s-castle.com/adviser/>

[申込締切] 10月末日

■ 登録はこちら! <https://s-castle.com/adviser/>

担当：株式会社リバネス 教育開発事業部 立花 ed@Lnest.jp



探しに行こう 自分の場所

目標を見つけ、実力を養い、理想の場所にたどり着くために

どんな道を進むべきだろうか。

どんな研究者になりたいのか、活躍するには何が必要なのか。

そして、どんな研究キャリアがあるのか。

ただ、じっと待っていても答えは見つからない。

いろいろな人に会い、さまざまな場所を見ることで

自分の未来を描くヒントを見つけよう。

変化を楽しみながら

さあ、自分の場所を探しに行こう。



「伝わるデザイン」で、 アカデミアの研究を世に羽ばたかせる

片山 なつ さん

千葉大学大学院 理学研究院
日本学術振興会特別研究員 (RPD)

千葉大学でポスドクとして植物の形態を研究する片山なつさんは、その研究活動の傍ら、研究発表の資料作成でわかりやすく伝えるためのデザインについて、ウェブサイトや書籍、セミナーを通して情報を発信している。研究活動と両立する片山さんの取り組みから、「研究室の外にも活躍の場を作る」という新しいポスドクの生き方が見えてきた。



どうしたら伝わる？

植物の形態研究の魅力

片山さんが興味をもったのは、植物の驚くほど多様に進化した形態だ。河川の急流域にある岩の上に生息するカワゴケソウ科の植物は、被子植物であるにもかかわらず、一見するとコケ植物のような形態をしている。どのような進化を辿ってこのような形態を獲得したのか、形態学・分子進化的なアプローチで解明に挑んでいる。そんな片山さんは、学部生の頃から自身が感じる植物の形態学研究のおもしろさ、科学的な価値をいかにしてわかりやすく伝えられるのか、試行錯誤を続けてきた。「言葉でわかりやすく説明することが苦手だったので、発表スライドを眺めるだけで研究内容が伝わるようなデザインにしたかったんです」と振り返る。自分の苦手なことを乗り越えようとする前向きな姿勢が、わかりやすいスライドデザインを独学で追求するきっかけとなったのだ。

研究、デザイン、どちらも全力

博士課程に進学する頃には、周囲の学生や研究者が伝わるデザインのノウハウを求めていることに気がついた。「何か世に残るものを作りたい」と感じていた片山さんは、研究室内だけで共有する資料ではなく、仲間と共にウェブサイト立ち上げに挑戦した。独学で習得したスライドデザインの知識をそのウェブサイトにもとめて発信し、より多くの研究者が自身の研究をわかりやすく伝えられるようになることを目指した。「研究発表においてわかりやすいデザインは大事」——これは、多くの研究者が考えることであろう。しかし片山さんは、そこから一步踏み出し、「伝わるデザインを発信する」ことを実行したのだ。その結果、ウェブサイトの内容が書籍化され、セミナーの講師として呼ばれることもある。研究以外のことであっても、興味を持ったことに全力を注ぐ姿勢が、新しい活躍の場を創ったのだ。



▲「伝わるデザイン」のウェブサイト。文書、スライド、ポスターなどの「わかりやすく伝えるデザイン」のノウハウが集約されている。

片山 なつ (かたやま なつ) プロフィール
 金沢大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了。博士(理学)。日本学術振興会特別研究員(学振)PDなどを経て、現在千葉大学にて学振RPDとして勤務。2010年にウェブサイト「伝わるデザイン | 研究発表のためのユニバーサルデザイン」を開設。2017年に「オフィス伝わる」を開設し、運営している。

わかりやすく伝える力が、研究の後押しに

デザインの発信を続けるうちに、片山さん自身の研究にもプラスの効果があった。1つは、プレゼンスライドや研究費申請書の作成が効率化したことだ。限られた紙面で「何を伝えるか」を考え、自身の研究の本質を捉え直すことで研究のポテンシャルを端的に伝えられるようになった、と片山さんは考えている。また、一般向けのアウトリーチ活動でもその効果を感じるという。研究の面白さをわかりやすく工夫して紹介すると、聴衆からの質問が増え、活発なコミュニケーションにつながったのだ。聴衆からの素朴な質問に逆に気づかされることも多く、新たな視点で研究を振り返る機会になった。相手が研究者であっても非専門家であっても、わかりやすく伝える姿勢を持つことが研究の本質に迫ることにつながり、結果的に自分の研究を加速させる一助になったのだ。同様の効果は、片山さんだけでなく、伝わるデザインを身につけた他の研究者にもあったはずだ。

回り始めた両輪、加速しだした研究者人生

片山さんは現在、伝わるデザインを発信する所属を「オフィス伝わる」と名付け、活動している。

名前を付けて活動することで、2つの利点があったという。1つは、研究室以外で自分の価値を発揮できる場があると周りにアピールできるようになったこと。2つめは、アカデミア研究と伝わるデザインを発信する活動の2つの軸を確立できたことだ。「最初はアカデミアで研究者としてやっていけるのか不安でしたが、研究以外にも自分が活躍できる場所を作ったことで自分の立ち位置が安定しました」と片山さんは話す。これまでの「研究者」の枠にとらわれず、常に自分が活躍できる場を探す。片山さんの持つこうしたアクティブな姿勢が、ポスドクとしての新しい生き方を切り開き、次世代の研究者像を作り上げていくのだろう。

文・大西 真駿

「伝わるデザイン」の書籍を読んだとき、「研究しながらこれほどの本を書く片山さんの原動力は何か」とても興味がありました。研究室の外でも自分の価値を発揮する片山さんの姿を取材することで、ポスドクがどう生きるかを考えるヒントが与えてきました。最近は高校生に向けても伝わるデザインの発信を始められており、今後のご活躍から目が離せません。



所属や領域にとらわれず 直感で自由に研究して良い

尾上 弘晃 さん

慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 准教授
株式会社セルフファイバ 取締役 CTO

マイクロ・ナノスケールの微細加工技術を基盤に、マイクロマシン・情報デバイス・再生医療への展開を目指している尾上弘晃さん。2016年より、ベンチャー企業の役員も兼任している。なぜ分野を、世界をまたぎ、研究者の枠をも超えて研究を続けるのか。そこに至るには、大学院時代の先輩の姿と「生命」への関心と研究の自由さがあった。



研究室で学び、外でも学ぶ

大学院では情報理工学系研究科でマイクロロボットの研究室を選んだ。「好奇心が旺盛で、元来いろいろ知りたいタイプ」だが、昆虫にヒントを得て生命の自己組織化を研究対象にした結果、工学系の学生からは風変わりと言われた。その頃、研究者としての将来は漠然としていたが、大学院時代の先輩たちは輝いて見えた。「楽しそうに研究し、海外に目を向け、いずれ独り立ちすると意気込む人たちだった」と、研究に向かう姿勢を示してくれたという。そこで尾上さんも研究室の中にとどまらず、海外に発信をして、研究領域を超えた交流をもつようになった。

博士課程までの6年を経て「論文を多く出している海外の研究室に行ってみよう」と、微細加工とバイオに関連する研究をしている研究室をインターネットで検索し、ひたすらメッセージを送り続けた。合格通知をもらった先がカリフォルニア大学バークレー校だ。

環境でなく、熱意とアイデアが全て

渡航前は「研究環境も整った天才だらけのところだろう」と期待したが、その目論見は大きく外れた。一番の収穫は「世界のどこにいても同じ。環境ではなく、自分次第。アイデアと熱意が全て」ということだった。1年半の海外生活ののち、日本に戻り、大学院時代に一緒に過ごした先輩の研究室に所属した。

微細加工技術をベースに、環境が変わっても、変わらずアイデアと熱意をもって研究に打ち込み続けている。科学技術振興機構 (JST) ERATO プロジェクトで研究総括補佐を務めた際に『Nature Materials』に発表した、マイクロファイバに細胞を詰める「細胞ファイバ」技術をもとに創業したのが株式会社セルフファイバだ。現在尾上さんはここの企業役員を兼務している。技術の社会実装に向けて「視野が広がり、研究テーマ設定や計画の立て方にも企業側の目線をもつことができている」という。実際に、医工連携として医学部と共



▲カリフォルニア大学バークレー校時代の尾上さん

同研究を検討する際も「こちらの技術や手段を提示するだけではない」と、ニーズや課題を抱える医師に直接話を聞きに行き、現場の視点や思いを汲み取ることを欠かさない。

研究の自由さを楽しみたい

尾上さんの研究テーマは多彩だ。ウェブサイトには「マイクロナノスケールの微細加工技術を基盤技術とし、機能性分子素子やハイドロゲルなどの高分子材料、また、細胞や組織に代表される生体材料など、様々なスケールの素材を幅広く統合する物作りの構築法や、それにより創り出される新たなシステムを研究」とある。この一文だけに、工学、化学、生物、物理学、エンジニアリングなど実に多様な分野のキーワードが含まれている。また、大学の教員と企業の役員という2つの役割をもつことから、その多彩さが見て取れる。

「私には、微細加工という専門領域はあるが、自然や生命がすべてが研究対象。生命を超えるものを作りたい。突き詰めるほど、生命は素晴らしい。その仕組みを理解したい」と、研究に対する姿勢は、大学院時代に「風変わり」と言われた頃から、今もずっと変わらない。研究したいテーマは今も年々増えていくが、根本に流れるのは「生

尾上 弘晃 (おのえ ひろあき) プロフィール

2006年3月、東京大学大学院情報理工学系研究科博士課程修了。2007年よりカリフォルニア大学バークレー校化学科に客員研究員として細胞アレイの研究に従事。2009年に帰国後、東京大学生産技術研究所にて細胞ファイバ技術を開発。2014年より慶應義塾大学理工学部機械工学科に着任。2016年より株式会社セルファイバ取締役CTOを兼任。博士(情報理工学)。

命を超えるものを作りたい」という強烈な好奇心なのだ。

そのような尾上さんに、研究の魅力を聞くと、その自由度の高さを挙げた。テーマによっては1人でもチームでも取り組める。自分の直感を信じて、分野融合で新たな研究領域で第一人者になることもできる。もちろん責任も伴うが、それ以上に自らが解明したい真理に向かって邁進できることが、他にない魅力だろう。尾上さんの研究テーマと経歴がそれを裏付けている。

尾上さんは、2014年より自らのラボをもち、学生を導く立場になった。「自らの好奇心のままに研究するのも良いが、学生と一緒に知らなかったテーマを探究するのとても良い」とその活動自体を楽しんでいる。10年後も20年後も変わらず、後進とともに、熱意を持って自由に研究している姿が目に見え、浮かぶ。

文・大坂 吉伸

研究分野を超えて、アカデミアだけでなくベンチャー企業の立場も持ち、研究成果の社会実装に向けてご活躍されています。自然や生命に向き合い信念をもって研究されている姿勢に大変心を打たれました。





「自分の目指す研究者はどんな姿だろう？」「研究経験を活かして将来、何をしたいこう…？」そうした研究者としての「これから」に関する疑問を解消し、自分の目標や未来像を照らす羅針盤のような思考ツールを紹介するコーナーです。



今回の
ツール

「なんか変だな？」を指針に変える ～違和感abcdクエスチョン～

薬学が専門の^{すだち しょうこ}巢立翔子さんは、将来を考えるにあたり、自分はどんなことで社会に貢献できるのだろう？と自問していました。研究はもちろん、いろいろなことに興味はあって、誰かの役に立つことがしたい。でも、自分が本当に心を注いで取り組めることって何だろう？そうしたモヤモヤを抱えながらこのツールを使ってみました。

No.	a.	b.	c.	d.
	あなたが「なんだかちょっと変だぞ」という違和感を抱く物事は何ですか？	その違和感をあなたが抱くのはなぜだと思いますか？原点となる実体験があれば書いてください。	その違和感を抱く物事によって、誰か困っている人はいますか？誰が、どのように困っているか、なるべく具体的に書いてください。	cの困りごとの解消に向けて、今の自分がすぐにはできないことはありますか？
1	人が光合成できないこと	小学生の頃に、人間も光合成ができれば食事をせずにずっと遊んでいられるのと思い、生物学に興味をもつきっかけとなった		
2	戦争がなくなること		戦争に巻き込まれた人々やその家族	
3	高齢者の骨折の治りがとても遅く、完治しない場合もあること	散歩が好きだった祖母が転んだ際に脚の骨を折り、なかなか治らずに外出ができず、どんどん元気がなくなっていった	事故などで骨折をした高齢者	いま取り組んでいる細胞培養の研究が、骨にも応用できないかを調べてみる
4				

※赤字部分を巢立さんが記入

巢立さんが書き出した違和感のうち、3つめはa, b, cすべての質問を埋めることができました。根底に実体験があり (b)、なおかつ誰かが困っている様子が具体的にイメージできる (c) 違和感、自分の関心と社会の課題が重なっているものといえます。「たしかに高齢者の骨折のケアは強いやりがいを感じられるテーマかもしれない。いま取り組んでいる細胞の研究経験が活かせないか、調べてみよう！」巢立さんは、dに書き込んだ新しい一歩を踏み出してみることにしました。

PCで書き込めるシートのダウンロードができます。

詳しい使い方や、他の分野の研究者が書いたシートもチェックできます！

■ 使ってみたい人はwebへ！ <https://lne.st/incube50-toolbox/>



リバネス研究費 50 回記念特集

意志ある一步を飛躍につなげるリバネス研究費



リバネス研究費は、自らの研究に情熱を燃やす若手研究者を支援するグラントです。80社を超える企業とともに設置し、今回で50回目を迎えます。

私たちは、リバネス研究費にはアクティブな研究者の背中を押す力があると考えています。

たとえば申請者・採択者の中から、分野や組織の枠組みを超えたプロジェクトを立ち上げたり、ベンチャー企業を立ち上げたりと、活躍する若手研究者が数多く現れました。

これまで、研究者はどのような想いで応募し、その経験を後の研究人生にどう活かしていったのでしょうか？

当時学生だった採択者の体験談をもとに、応募という一步をきっかけとした若手研究者の飛躍の軌跡と、リバネス研究費がどのようにその背中を押してきたのかを紐解きます。

**来たれ！
野心を抱く若手研究者
「incu・be賞」
募集開始**

歴代採択者に聞く! リバネス研究費の使い倒し方

今回第50回を迎えるリバネス研究費。採択された若手研究者はのべ304人に上ります。応募した先輩たちは、どのようにこの研究費を活用したのでしょうか？ リバネス研究費をフル活用している歴代採択者9名の方に、応募の理由と使い倒し方を聞きました。

Topic1 なぜリバネス研究費に応募したのですか？



研究室の先生や先輩に勧められて

- 博士課程の頃、指導教員からの紹介で知った。研究費を自分で取ってくる経験を積んでみたかった。
- 自分のテーマが研究室内でなかなか評価されなかった頃、先輩が申請を勧めてくれた。



自分の新しいテーマを立ち上げたい

- 新しい研究室に移って2年目の頃。自分のやりたい研究テーマに特化した予算がほしかった。
- 科研費ではお金がつきにくい、社会課題をベースにした研究に挑戦したかった。



研究資金がほしい

- 当時は他の助成金が全く取れておらず、申請できる先を手当たり次第に探していた。
- 自由度の高い研究費を探していた。リバネス研究費はその先駆けだった。



企業とのつながりを持ちたい

- 企業の技術や装置が使えると、研究をより加速できると考えた。
- リバネス研究費はいわば設置企業とタッグを組んで進めるプロジェクト。共同研究の提案として申請書を書いた。

<調査に協力してくれた皆さん>

飯塚 怜さん (第17回オンチップ・バイオテクノロジーズ賞、第21回エンバイオ賞)、今清水 正彦さん (第1回リバネス賞)、今村 公紀さん (第18回ライフテクノロジー・ジャパン賞、第24回オンチップ・バイオテクノロジーズ賞、第29回SCREENホールディングス賞、第36回L-RAD賞)、事崎 由佳さん (第2回リバネス賞、第6回トライアングル賞)、小南 友里さん (第28回吉野家賞)、田中 宗さん (第18回ディスカヴァー・トゥエンティワン賞)、戸森 央貴さん (第16回ナプテスコ賞)、乗本 裕明さん (第14回ディスカヴァー・トゥエンティワン賞 奨励賞、第29回レイコップ Good Sleep賞)、正木 郁太郎さん (第29回ENERGIZE賞、第36回超異分野教育賞)

Topic2 採択によってどんなことが得られましたか？



研究者としての 自信につながった

- 自分で書いた申請が通った、という事実が自信になった。
- 非専門分野の人に自分の研究を伝える自信が付き、積極性が生まれた。端的にいうと一皮むけた。



新規テーマを 開始できた

- 新しい研究テーマを始めるための探索的な調査を行うのに、50万円という予算がちょうど良かった。
- 問題の種と切り口、研究モデルのプロトタイプができた。



申請書を書き 書けるようになった

- 何度も繰り返し申請する中で、申請書を書く力を養うことができた。
- どうやったら審査員に読んでもらえるか試行錯誤したことで、科研費の申請書も書きやすくなった。



次の研究費を 取るきっかけになった

- リバネス研究費での研究実績を元に、科研費や財団の助成金に申請できるようになった。
- 次のポストを探すときに、履歴書の業績欄を書くのに役立った。



異分野との掛け合わせを 考えるようになった

- 自分のテーマを広義に捉え、異分野と掛け合わせた時に何ができるかを考えるようになった。



企業との共同研究や 交流ができた

- 企業との共同研究に発展した。
- お金だけでなく、企業との人的交流ができたことが収穫だった。現在も相互交流が続いている。

■先輩たちの声から、リバネス研究費は単に研究資金が手に入るだけでなく、研究者としての考え方の成長や、企業との接点をもたらす機会でもあることが見えてきました。

次頁では、リバネス研究費をきっかけに大きく飛躍した、2人の先輩研究者を紹介します！

企業と連携したから見えた、 産業界の現場感

第 28 回リバネス研究費吉野家賞

「解凍方法の最適化に向けたタンパク質分解の解析」

採択当時：博士課程 2 年

東京大学大学院 農学生命科学研究科
水圏生物科学専攻 水圏生命科学講座
特任助教

小南 友里 さん



アカデミアと現場の乖離を感じて

アカデミアの研究で食品産業の現場を忠実に再現するのは、どうしても限界がある。たとえば、食品の流通・加工の現場からサンプリングされた試料を直接入手することは大変困難であるため、大学で扱う研究用試料は現実の状態とは異なる擬似的なものになりがちなのだ。当時博士課程に在籍していた小南さんは、現場の実態とアカデミアの研究の乖離に課題感を感じつつも、仕方がないところかで受け入れてしまっていた。

社会に応用できるリアルな研究がしたい

しかし、吉野家と連携してからその想いは変わっていく。採択テーマは「解凍方法の最適化に向けたタンパク質分解の解析」。修士の頃から興味があった食品解凍の課題に、当時使っていたタンパク質解析のアプローチで挑んだものだ。連携により、現場のサンプルを扱えた意義は大きかったという。「実際に吉野家の工場で処理された牛肉をサンプルとしていただいたのですが、こうしたものは通常では研究用に 1kg など少量だけを入

手することができません。自分では絶対手に入れない、本当にいいものを頂いたなと思いました」。現場で現実の流れの中から抽出された本物を扱えるからこそ、再現性の高い研究ができる。この経験を通して、せっかくならリアリティのある研究をしたいと感じるようになった。

「現場の視点」でモノを見るように

小南さんが吉野家賞に申請したのは、「自由に使える研究費がほしい」という理由からだった。だが、採択を通じて研究費だけでなく、現場のモノを現場に近いプロセスで扱い、実社会により意味のある研究を進めるために必要な視点が得られたという。現在の小南さんは、共同研究の際、相手の常識や暗黙の了解についても考えを巡らせることを忘れない。「実際の場所に行けなくても、さまざまな視点で細かいことを聞くようになったと思います」。その気配りの徹底ぶりは、実際の作業工程から冷蔵庫の温度の違いにまで至る。リバネス研究費は、企業とアカデミアの壁を越えたひとつ高い視座を得るきっかけとなったといえるだろう。 (文・若林 里咲)

自分の仮説を専門分野の外に問い、 研究の芯を確立する

第14回リバネス研究費

ディスカヴァー・トゥエンティワン賞「新奇感覚の創成」

採択当時：博士課程1年

マックス・プランク脳科学研究所
研究員

乗本 裕明 さん



独自の視点で睡眠の研究に臨む

乗本さんは現在、ドイツのマックス・プランク脳科学研究所で、全生物共通の普遍的な睡眠のメカニズムがこの世に存在するのかどうかを調べるために、トカゲを用いた研究をしている。マウスやラットを使った実験をする人が多い中、レム睡眠—ノンレム睡眠の規則性がはっきりしているトカゲを選んだところに、既成概念に縛られない乗本さんの研究スタイルが現れている。大学院生時代から睡眠の研究にのめりこみ、独自の視点をもって研究に臨んできた乗本さんだが、その大きなきっかけはリバネス研究費にあった。

独創性という諸刃の剣

自分で研究アイデアを膨らませて進めようとした研究の1つに、大学院生時に着想した脳への新奇感覚の付与がある。「たとえば人間は磁場を知覚できませんが、通常知覚できない情報をセンサーを使って脳に入力できれば、新たな感覚の獲得と脳機能の拡張につながるのではないかと考えました」。しかし、脳機能の解明が主軸になっている研究室の中で、乗本さんが考えたテーマはメンバーの関心とは合わず、研究の意義に耳が傾

けられることはほとんどなかった。はじめは自信满满で挑んでいた乗本さんだったが、次第に自信を失い、研究に向かう気持ちもなくなってしまっていた。

専門外からの評価が、研究人生を変える

そのような時期に、このテーマを唯一面白いと言ってくれていた先輩から「乗本の研究が面白いのかどうか、研究室外の人に問うてみたら」と紹介されたのがリバネス研究費だった。応募した賞は、脳研究とは全く関連のない分野の審査員が評価する賞。乗本さんは「ここでも評価されなかったら研究をやめよう」という強い覚悟で応募した。

その結果は奨励賞だった。助成金は出なかったが、自分の研究内容が評価されたことが乗本さんにとって大きな自信につながった。「自分が面白いと思うテーマをどんどん進めて良いんだと気づき、研究に臨む自分の芯を確立することができました」。まだ研究を初めて間もない大学院生であれば、自分が強くやってみたいと思う研究や信じる仮説があっても、それに取り組む機会をなかなか得られないこともある。リバネス研究費は、学生が自らの仮説を外に問い、自力で検証する第一歩となるだろう。(文・西村 知也)

分野不問。情熱ある大学生・大学院生に 「リバネス研究費」最大50万円を提供する 「incu・be賞」設置!

株式会社リバネス
代表取締役 グループ CEO

丸 幸弘



いまやリバネス研究費は、世界的な業績を上げる研究者や社会課題の解決を目指すアントレプレナーといった、最先端を駆ける若手の登竜門となっている。12年前に始まったこのプロジェクトの原点は「研究を続けられない仲間の窮状を何とかしたい」という想いにあった。リバネス代表の丸にその原点を聞いた。

「自分の研究に熱い思い入れのある人が研究できない」。2008年末のこと、私たち創業メンバーの友人のポスドクが、プロジェクト予算の関係で半年間の収入が得られなくなってしまったのです。我々は将来有望な若手ですら研究を続けることが困難になる日本の現状を見過ごすことができませんでした。そこで、今の代表の1人である高橋修一郎の発案で、日本で初めてのアクティブな若手研究者を応援する研究助成金を立ち上げることにしました。リバネス研究費の誕生です。

ありとあらゆる分野からアイデアを募集し、特にその情熱を応援したい7名を採択しました。その1人は先に挙げた友人のポスドクです。彼は採択後にアメリカで研究のチャンスを得て、今は産業技術総合研究所で多くの論文を書き、今年6月に開催された超異分野学会関西フォーラムでは最優秀ポスター賞を受賞しました。また、当時お茶の水女子大学の准教授だった瀬々潤さんは、採択をきっかけに産業界での研究開発の可能性に気づき、研究機関に所属しながら、アカ

デミアと産業をつなぐベンチャー企業を立ち上げました。こうした若手研究者に期待をかけて、今では80社以上の企業がこのリバネス研究費の取り組みに参加してくれるようになり、採択された研究者数は304名、助成総額は1億円を超えました。

50回を迎える今回、誕生の原点に戻り、自分のテーマを主体的に進めたいありとあらゆる分野の大学生・大学院生を応援するリバネス研究費「incu・be賞」を設置します。自分がこれほと思うテーマに向けて自力で研究費を手に入れ、自らの意志で前に進める。そうした野心をもつ人が一歩を踏み出せば、結果的に新しいつながりを得て独創的な挑戦を生み出し、活躍の場を広げることができるはずです。目標を見つけ、それに向かって実力を養い、自らの未来を創り出す若手研究者を応援したいという想いを出発点に、私たちが『incu・be』を創刊したのは2006年のことです。継続は力であると信じ、『incu・be』100号、100回目のリバネス研究費に向けて私たちも挑戦を続けていきます。



意志ある一歩が未来を拓く 研究応援プロジェクト

第50回リバネス研究費 申請者募集中!

incu・be 賞をはじめ、4 件の研究費をオープンしています。自分の研究に情熱を抱く、意志ある若手研究者からの応募をお待ちします。

助成対象：自分の研究に熱い思いを持っている 40 歳以下の若手研究者・大学院生・学部生
用途：採択者の希望に応じて自由に活用できます。

助成内容：50 万円

※「incu・be 賞」のみ条件が異なりますので、下記をご覧ください

● incu・be賞

対象分野

大学生・大学院生が自ら取り組むあらゆる研究

20歳以上の大学生・大学院生の皆さんによる「自分が推進したい研究」を募集します。研究分野は問いません。研究室で実施していないテーマでも申請できます。

採択件数 最大100件

助成内容 研究費上限50万円
(5~50万円の中で計画を立ててください)

申請締切 2020年10月31日(土) 24時まで

担当者
より
一言

株式会社リバネスでは、若手研究者が目標を見つけ、それに向かって実力を養い(incubate)、未来の自分を作り出す(be)研究キャリア発見マガジン『incu・be(インキュビー)』を発刊し、創刊50号を迎えました。同じく今回50回を迎えるリバネス研究費も、若手研究者が自らの研究を進めることで研究キャリアを切り開く後押しになって来たと確信しています。この度、『incu・be』の発刊50号を記念するとともに、自分の研究に熱い思い入れのあるあらゆる分野の学生・大学院生を応援したいというリバネス研究費の原点にも立ち返り、本賞を設置しました。いま、自ら推進している研究はもちろん、これから自分が挑戦したい研究テーマを募集します。

● 日本ハム賞

対象分野

食の未来につながる研究

● プランテックス賞

対象分野

植物科学分野に関するあらゆる研究

● パナソニック アプライアンス社賞

対象分野

健やかな心身と未来の暮らしにつながる研究

リバネス研究費の登録および採択情報はこちらから▶

<https://r.lne.st/grants/>



キャリアディスカバリー フォーラム 2020



研究開発型企业と研究者が描く未来を議論

株式会社リバネスでは、2020年6月20日にキャリアディスカバリーフォーラムを実施しました。企業と学生が研究から描ける未来の社会と一緒に議論する場で、多くの参加者が、研究者としての活躍の場を見つけることができました。

6月20日(土) 10:00～18:00

TKP市ヶ谷カンファレンスセンターで開催
(一部オンライン参加)



どんな議論があった？



企業のディスカッションテーマの事例

- どこまで植物の可能性を引き出せるのか？
- 望む健康を手に入れるためには？
- 「地球を耕す」地球の課題を解決しよう！

ブース・ワークセッションで、参加者と企業が、相互に研究の紹介をし、今企業が挑戦するテーマに関連した未来の研究やビジネスについて議論しました。

参加者の感想は？



参加者の声

- 実際に研究所を訪問し、共同研究をする約束をしました。
- 次の課題の解決策について一緒に描くことができ、地元の資源を生かす現場と一緒に見てみようという話をしました。

フォーラム終了時には、インターンや会社訪問など、企業と具体的な約束をする参加者が多く見られました。

【次回】キャリアディスカバリーフォーラム2020冬参加者募集!

若手研究者と研究開発から社会課題の解決に挑戦する企業の出会いの場を増やすため、今年度2回目の実施が決定しました!

12月5日(土) 13:00~18:00

※9月申し込み開始

場所:センターオブガレージ

〒130-0003 東京都墨田区横川1-16-3

内容:研究開発型企业とのブース・ワークセッション

対象:若手研究者(学部生~ポスドク・社会人まで)

9月申込開始!



<https://cdf.lne.st/>

【12/5参加決定!】研究者とともに研究業界の課題を解決する

競争的資金の研究課題データやプレスリリースを集積した日本最大級の研究データベース「日本の研究.com」を運営するバイオインパクトは、データの活用やメディアとしての展開を起点に、研究と社会をつなぐことを目指す。研究を社会に伝える仕事に関心のある仲間を求めてフォーラムに参加した。「研究業界にはさまざまな課題がありますが、制度の問題、環境の問題、資金の問題など、どれも複雑に絡み合っています。研究者とともに課題とそれぞれのつながりを洗い出して、解決策を考えていきたいのです」。

フォーラムではのべ30名の研究者と議論を交わし、参加者の1人とのインターンシップが決まった。研究者を志しながら科学の伝え方にも強い興味をもつ彼女は、研究業界の課題を解決する杉原さんのビジョンに共感したという。インターンシップでは研究情報発信の基礎から実務を通して学んでいる。若手



株式会社バイオインパクト
代表取締役 杉原淳一さん

研究者の視点から、新たな提案が生まれることに期待がかかる。

バイオインパクトは継続的な議論や仕掛けをともにできる仲間を求め、12/5のフォーラムにも参加を決めている。若手研究者のみなさんからの研究業界の課題解決のアイデアをぜひぶつけてほしい。

『incu・be』を作っているのはどんな人？

編集部スタッフを紹介します



ライター

伊達山 泉 博士 (バイオサイエンス)

プロフィール

大阪生まれ、奈良県育ち。高校卒業後に渡米、リベラルアーツの大学で生化学を専攻。卒業後、タイヤメーカーの材料開発部で2年半働いた後、奈良先端科学技術大学院大学に進学。在学中に日本に来た留学生たちのキャリア設計に関心を持つようになり、現在、日本に来た海外研究者たちの活躍の場を模索している。

私が大学院に進学したのは、企業で2年半働いてからでした。社会とつながりながら研究をしたいと、在学中は実験教室やサイエンスカフェなどの企画運営や、研究者以外の人と議論する機会を持っていました。研究にやりがいを感じ、アカデミアに進むことを目指していましたが、いよいよ学位取得という頃に、教育や研究の社会接続にもっと深く関われる方法は、本当にアカデミアしかないのかと迷いました。

今回、私は特集「未来に駆け出す指針の見つけ方」の執筆に関わる中で、その頃のことが思い出されました。振り返れば、私も自分の道を見つけるまでに自分の経験や想いを細分化し、再構築していたのだと思います。大学での活動の仕方を設計してみたり、国内外の企業を調べ、キャリアセミナーなどに参加したりもしましたが、結果として私は、「次世代研究者育成」と「科学とビジネスの橋渡し」に取り組むリバネスに出会いました。誰も正解を教えてくれないからこそ、読者の皆さんも迷いながらも「私はこれがいい」と思える歩みができることを願っています。

株式会社リバネスでは仲間を募集中です。

「科学技術の発展と地球貢献を実現する」の理念の下、自らの専門性を活かし、未来を創造するプロジェクトを行いたい研究者の仲間を募集しています。『incu・be』の制作などを通じて、研究者のキャリアを加速するプロジェクトを創ることもできますよ。

■ リバネススタッフと参加者の一人一人の未来への熱を語るイベント

「Visionary Cafe」を開催

東京：2020年10月18日(日) 10:30～13:00

大阪：2020年10月11日(日) 16:00～18:00

■ 申込・詳細はこちら <https://lne.st/recruit/>



採用・Visionary
Cafe詳細はこちら



人材応援 プロジェクト

私たち株式会社リバネスは、知識を集め、コミュニケーションを行うことで新しい知識を生み出す、日本最大の「知識プラットフォーム」を構築しました。教育応援プロジェクト、人材応援プロジェクト、研究応援プロジェクト、創業応援プロジェクトに参加する多くの企業の皆様とともに、このプラットフォームを拡充させながら世界に貢献し続けます。

(50音順)

藍澤證券株式会社
株式会社アオキシテック
アクプランタ株式会社
株式会社アグロデザイン・スタジオ
味の素ファインテクノ株式会社
アメリエフ株式会社
株式会社池田理化
inaho株式会社
インテグリカルチャー株式会社
インテリジェント・サーフェス株式会社
株式会社Inner Resource
有限会社ヴァンテック
株式会社ウェルナス
株式会社エクサウィザーズ
株式会社Eco-Pork
MI-6株式会社
オリエンタルモーター株式会社
株式会社ガルデリア
関西電力株式会社
コニカミノルタ株式会社
KOBASHI HOLDINGS株式会社
株式会社シグマクス
株式会社ジャパンモスファクトリー
株式会社セルフファイバ

大正製薬株式会社
株式会社ダイセル
株式会社ダスキン
THK株式会社
DIC株式会社
株式会社DG TAKANO
Delightex Pte. Ltd.
日本製粉株式会社
日本ハム株式会社
日本たばこ産業株式会社
株式会社バイオインパクト
パナソニック株式会社 アプライアンス社
株式会社日立ハイテク
株式会社ヒューマノーム研究所
株式会社ファームノートホールディングス
株式会社フォーカスシステムズ
株式会社プランテックス
株式会社フロンティアコンサルティング
マイキャン・テクノロジーズ株式会社
株式会社メタジェン
株式会社吉野家
レキオ・パワー・テクノロジー株式会社
株式会社Rhelixa
ロート製薬株式会社

研究応援教員とは

研究の世界に踏み出そうとしている学生に対し「研究キャリア」を考えるきっかけを提供するため、『incu・be』の配布等にご協力くださる先生方を募集しております。『incu・be』を毎号、ご希望の部数を無料でお届けする他、リバネス研究費やキャリアイベント等のお知らせをメールにてお送りいたします。ご協力いただける場合には、下記のフォームからご登録をお願いします。

<https://lne.st/ru>



研究応援教員 (敬称略) 603 名 (一部掲載)

- 【愛知学院大学】市原 啓子
- 【会津大学】寺蘭 淳也
- 【藍野大学】外池 光雄
- 【茨城大学】中平 洋一
- 【宇都宮共和大学】須賀 英之
- 【江戸川大学】浅岡 章一、福田 一彦
- 【大阪大学】佐藤 尚弘、井上 克郎、久武 信太郎、瀬恒 謙太郎、池田 裕香、岡本 行広、大竹 文雄
- 【大阪工業大学】河村 耕史
- 【大阪市立大学】蔡 凱、中臺 枝里子、立花 太郎
- 【大阪電気通信大学】鄭 聖燾
- 【大阪府立大学】竹井 聖晴
- 【学習院大学】武田 晃司
- 【鹿児島大学】片野田 洋、上田 岳彦
- 【神奈川工科大学】白井 暁彦
- 【金沢大学】ゴトウ ヒロシ
- 【関西大学】河原 秀久、片倉 啓雄、工藤 宏人
- 【九州大学】吉村 淳、近藤 哲男、清水 邦義
- 【京都大学】山口 栄一、五味 良太、川本 純、今村 公紀、大日向 耕作、中野 伸一、宮野 公樹、望月 伸悦
- 【京都産業大学】川根 公樹
- 【京都府立大学】高野 和文
- 【京都府立医科大学】小野 勝彦、角田 圭雄
- 【近畿大学】生塩 研一
- 【熊本大学】杉本 学、米本 幸弘、佐々木 満
- 【慶應義塾大学】久保 健一郎、中西 泰人
- 【県立広島大学】阪口 利文
- 【高エネルギー加速器研究機構】大谷 将士
- 【工学院大学】三木 良雄
- 【高知大学】仲嶺 真
- 【甲南大学】久原 篤
- 【神戸大学】影山 裕二
- 【国立環境研究所】一ノ瀬 俊明、中島 英彰、藤野 純一
- 【国立成育医療研究センター】要 匡
- 【埼玉大学】大久保 潤
- 【埼玉県立大学】国分 貴徳
- 【産業技術総合研究所】安藤 尚功、宮崎 真佐也、三輪 洋靖
- 【滋賀大学】大平 雅子
- 【滋賀医科大学】平和也
- 【静岡大学】成川 礼、松井 信
- 【島根大学】秋吉 英雄
- 【首都大学東京】可知 直毅、酒井 厚
- 【信州大学】清水 雅裕、片岡 正和
- 【成城大学】境 新一
- 【千葉工業大学】坂本 泰一、山本典史
- 【中央大学】松永 真理子
- 【筑波大学】鈴木 石根、永田 毅、林 洋平
- 【帝京大学】黒沢 良夫
- 【東京大学】牧野 義雄、有岡 学、梅田 靖、木下 裕介、川越 至桜、生長 幸之助、四本 裕子、矢作 直也、松田 良一、柳澤 大地、深野 祐也、田中一敏、飯塚 怜、池尻 良平
- 【東京海洋大学】戸田 勝善、濱田 奈保子、浦野 直人
- 【東京工科大学】中村 真男
- 【東京工業大学】因幡 和晃、猪原 健弘、田岡 祐樹、大上 雅史、大橋 匠
- 【東京工芸大学】大海 悠太、森山 剛、細萱 敦
- 【東京歯科大学】武田 友孝
- 【東京農業大学】相根 義昌、安田 麟太郎、松林 尚志、渡辺 智
- 【東京農工大学】山浦 紘一
- 【東京理科大学】金子 敏宏、山本 誠、諸橋 賢吾、生野 孝
- 【同志社大学】石浦 章一、太田 哲男、下嶋 篤
- 【東北大学】大関 真之、齋藤 将樹、山崎 翔平、鈴木 高宏、西村 平
- 【東洋大学】梅原 三貴久、廣津 直樹、清水 文一
- 【徳島文理大学】徳村 忠一
- 【鳥取大学】久郷 裕之
- 【富山県立大学】立田 真文、古澤 之裕
- 【長崎大学】松本 健一
- 【名古屋大学】佐藤 綾人
- 【名古屋工業大学】小田 亮
- 【日本大学】伊藤 賢一、渡邊 泰祐、福田 昇、浅井 朋彦、佐甲 徳栄、畠山 吉則
- 【日本女子大学】宮崎 あかね
- 【日本医科大学】若林 あや子
- 【ノートルダム清心女子大学】小林 謙一
- 【光産業創成大学院大学】瀬口 義浩
- 【広島大学】長沼 毅
- 【福井大学】沖 昌也
- 【法政大学】小池 崇文、吉田 一朗
- 【北海道大学】河西 哲子
- 【宮崎大学】山崎 有美
- 【武庫川女子大学】升井 洋至
- 【山形大学】戸森 史貴
- 【山梨大学】浜田 駿
- 【横浜国立大学】金子 信博、為近 恵美
- 【理化学研究所】篠崎 一雄
- 【立教大学】関根 靖彦、山田 康之、亀田 真吾、塩見 大輔
- 【立命館大学】野口 拓
- 【琉球大学】浦崎 直光、與那 篤史、千住 智信、荒川 雅志
- 【労働安全衛生総合研究所】久保 智英
- 【和歌山工業高等専門学校】楠部 真崇
- 【早稲田大学】尾形 哲也、小塩 真司、田中 宗、玉城 絵美
- 【Thomas Jefferson University】Kiyosuke Kazama

(2020年8月19日現在)

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン『incu・be』とは

『incu・be』は、目標を見つけ、それに向かって実力を養い (incubate)、未来の自分をつくり出す (be) ためのきっかけを提供します。自らの未来に向かって主体的に考え行動する若手研究者を、企業・大学とともに応援します。

『incu・be』の配布・設置について

『incu・be』は、全国の理工系大学・大学院の学生課・就職課・キャリアセンター等に設置いただいているほか、「研究応援教員」のご協力により研究室や講義にて配布いただいております。学校単位での配布・設置をご希望の場合、その他お問い合わせは下記までご連絡ください。

株式会社リバネス incu・be編集部

TEL : 03-5227-4198

E-mail : incu-be@lne.st

中高生のための研究キャリア・サイエンス入門

『someone』(サムワン)



研究をはじめたばかりの読者に、最先端の研究内容をご紹介します。

未来の研究仲間となる後輩にお勧めください。

お問い合わせ : someone@leaveanest.com

++ 編集後記 ++

『incu・be』vol.50の発刊とリバネス研究費第50回の募集が重なった今回は、私たちにとってもこれまでの歩みを振り返る機会となりました。たくさんの研究者の生き方に触れ、キャリアとは最初から見通しよく開けているわけではなく、経験や行動を蓄積した結果として見えてくるものなのだなど、改めて感じました。道は最初からできているわけではなく、これまでの歩みが道となる。そうした想いを表紙に込めました。みなさんがこれまで歩んできた「道」の先に未来を描くためのヒントをお届けできれば幸いです。(江川 伊織)



2020年9月1日 発行

incu・be編集部 編

staff

編集長 江川 伊織

art crew 昆 美菜子

古川じゅんこ

清原 一隆 (KIYO DESIGN)

編集 石澤 敏洋 / 上野 裕子 / 環野 真理子 /

齊藤 想聖 / 神藤 拓実 / 高橋 宏之 /

立花 智子 / 仲栄真 礁 / 西山 哲史

記者 内田 早紀 / 大坂 吉伸 / 大西 真駿 /

黒住 嶺 / 重永 美由希 / 伊達山 泉 /

塚越 光 / 西村 知也 / 平田 和也 / 若林 里咲

発行人 丸 幸弘

発行所 リバネス出版 (株式会社リバネス)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町 1-4

飯田橋御幸ビル 5 階

TEL 03-5227-4198

FAX 03-5227-4199

E-mail incu-be@lne.st (incu・be編集部)

リバネス HP <https://lne.st>

印刷 株式会社 三島印刷

© Leave a Nest Co., Ltd. 2020 無断転載禁ず。

